13.

青森・八戸　縄文の郷「是川」　2008.10.30.

縄文文化を代表する是川遺跡・風張遺跡を訪ねる

- 縄文漆の素晴らしい文化を咲かせた縄文晩期　是川中居遺跡
- 墓域のある広場を環状に取囲む住居群　縄文後期の環状集落　風張遺跡

10 月 29 日薄暗い夕刻　東北新幹線の終点「八戸」駅に着く。久しぶりの青森　やっぱり肌寒い。
八戸を中心とした青森県東南部はかつて岩手県も含め、南部藩属したところで、「サンパチカミキタ」地方といわれる。漢字で書くと「三八上北」。はじめて名前を聞いたときには「コリャなんちゅうとこや」とびっくり。
南の岩手県から八幡平・八甲田の山並みと北上山地にはさまれた山間を馬渕川が北へ流れ、この八戸で太平洋へ注き、東北新幹線も南から北へこの川沿いを抜けて八戸へ入ってくる。この一帯に「戸」のつく地名があり、三戸・八戸・上北とこの地域の中心的な街をつなぎ合わせた呼び方という。
　青森に入ると「津軽」と共に何度も聞くこの「三八上北」の中心が現在の東北新幹線の終点「八戸」である。
　この八戸の街の端を取り囲む丘陵地に縄文の郷「是川」があり、真っ赤な色も鮮やかに縄文の漆製品が大量に出土した是川遺跡や縄文の土偶を代表する合掌土偶を出土した縄文の環状集落 風張遺跡が隣り合う。　また、八戸から南へ　八甲田の山々と北上山地の間を流れ下ってくる馬渕川沿いの山間を遡れば　縄文を代表する大集落　御所野遺跡。今も縄文の森に包まれ田中にストーンサークルの広場を中心に環状の土屋根竪穴住居が建ち並ぶ。

いずれも　縄文を代表する東北の遺跡で、青森三内丸山遺跡と一緒に世界文化遺産登録を目指している。是非自分の眼で確かめたかった場所である。

　この秋　会津でだいがく仲間の同窓会があった機会に　八戸の縄文の郷「是川」　の是川遺跡・風張遺跡と岩手県一戸町の御所野遺跡　分水嶺を越えて南に入った盛岡に隣接する滝沢村　岩手山山麓の湯舟沢ストーンサークルを訪ねました。
どんなところだろうか・・・・といずれも　地図を眺めながら　夢を膨らましてきた「サンパチカミキタ」。東北新幹線やかつての東北本線で何度も山間を通過しましたが、実際に街に入ったことなし。
やっと夢がかないました。
　今回は　このWalkの中から、八戸　縄文の郷(是川遺跡・風張遺跡)walkをまとめました。

左手奥　八戸の中心街から太平洋　中央を馬渕川が流れその向こう丘陵地に是川遺跡　そして右手奥　階上岳

新幹線　八戸駅前

八戸駅から本八戸への道

馬渕川にかかる大橋

　八戸市は太平洋を臨む青森県の南東部に位置し、地形は、なだらかな台地に囲まれた平野が太平洋に向かって広がり、その平野を三分する形で馬淵川、新井田川の２本の川が南の山岳部から北へ流れている。

臨海部には大規模な工業港、漁港、商業港が整備され、背後に工業地帯が形成され、優れた漁港施設や背後施設を有する全国屈指の水産都市、北東北随一の工業都市で北東北の地域拠点である。
また、八戸は石灰石・砂鉄の一大産地で、下北半島からこの八戸から久慈に掛けての種差海岸・釜石へ続く三陸海岸は古代蝦夷の製鉄拠点であった古代から今に続く東北の大製鉄地帯でもある。（八戸には　日本高周波鋼業などこの砂鉄を原料とした製鉄・精錬工場が幾つかありましたが、現在はすでにその生産はすべて終わっています。）

「サンパチカミキタ」にこだわりますが、岩手県北からこの青森県南「三八上北」にかけての一から九の数字に「戸」が付く地名は、古代末期から中世にかけて「糠部郡」と呼ばれた地域で、一から九の数字はこの糠部の中の地名が残ったものだという。この「戸」は、古代律令に基づくものと考えられており、馬産地として知られていたこの地域の牧場に関連させる考え方や、蝦夷支配のために北進する朝廷側の前進基地とする考え方もあり、よく分からない。 いずれにしても、八戸は「糠部」の中の８番目の「戸」ということを意味している。

1、八戸の街から縄文の里「是川」へ

是川遺跡・風張遺跡のある「是川　縄文の里」は、地図によると八戸市の市街中心部から南へ約４キロ離れた所　市街地を取り囲む丘陵地の一角にある。岩手県北部北上山地から北流して八戸市で太平洋に注ぐ新田川が八戸の平地に出る手前のところで新井田川が丘陵と丘陵の間中を縫って流れ、その両側になだらかな傾斜の段丘が広がり、この左岸の傾斜地一帯に是川遺跡。

右岸の高台に風張遺跡がある。是川遺跡はこの新井田川左岸の傾斜地にそれぞれ隣接して遺構が存在する3つの縄文遺跡の総称で、縄文時代晩期　卓越した縄文漆の木工品・土器が多数出土した中居遺跡＝約45,000㎡、縄文時代前期－中期の一王寺遺跡＝約 18,9000 ㎡、縄文時代中期の堀田遺跡＝約 1,1000 ㎡の三つの遺跡を総称して是川遺跡と呼ぶ。
特に川に接する一番低い段丘に卓越した赤漆塗りの漆工芸技術を示す植物性遺物(弓、櫛、腕輪、藍胎漆器などの木工品類ほか)や土器など是川遺跡の中心遺跡中居遺跡から出土し4000点をこえる出土遺物は工芸的にも優れ、「縄文の漆」を代表する遺跡として全国的に注目される。 この是川中居遺跡の横に是川縄文学習館と歴史資料館があり、是川遺跡の出土品が画展示されていると言う。
また、新井田川をはさんで対岸, 是川遺跡から500mのところに縄文後期の集落遺跡で, 合掌する土偶が出土したことで有名になった風張遺跡がある。　合掌土偶と共に私の興味は墓域がある広場の周囲を環状に竪穴住居が取り囲む縄文環状集落の大遺構。日本人の心のルーツ　縄文人の心を映すサークルがどんなところに配置されているのかを見るのが一番の楽しみ。
　何度も本で読んだり、その出土品に眼を奪われたりで、遺跡の名前は良く知ってはいるのですが、その場所については　五万分の一の地図と泊まったビジネスホテルで教えてもらった簡単な八戸のアクセス地図が頼り。
まあ、是川の郷に行けば、遺跡の横に是川縄文館があり、是川の縄文漆も見られるし、風張遺跡のことも分かるだろう。
　　10月30日　前日の変わりやすい天候から一転　素晴らしい快晴の朝。とにかく　早く是川の郷に行き着こうと　腰にGPS
をつけて7時過ぎに出発。　教えてもらったとおり、JR八戸線 久慈行の通勤・通学列車に乗り込み、馬渕川を渡って本八戸へ行く。
この本八戸駅が街の中心駅で多くの人が乗降しましたが、あっという間に人が散って誰も居なくなってしまった。

JR本八戸駅　2008.10.30.朝

　駅前から南部バス「市の沢行」に乗り、縄文学習館前で下車すれば、直ぐ前だと聞きましたが、本数が少なく時間が合わない。歩いたら遠いと言う。思案していたら、目の前に「是川団地行」のバスが停まる。
近くまで行くやろと乗り込むが、ダメだと言うのでやむなく降りてタクシーにする。
　　(是川に行って分かったのですが、「是川団地行」のバスで是川の丘陵地へ上り、この丘陵地を真っ直ぐに下れば、
　　風張遺跡を経て是川へ　約20分ほどのWalkでゆける。　歩くのが弱いとみられたのか・・・・)

駅前から　商店や市街地ビルが建ち並ぶ狭い道を縫って八戸の街を抜けてゆく。新幹線八戸駅は馬渕川の左岸側で田園地帯の広がる平地の新市街地なのに対して、川の右岸の八戸の中心市街地が広がる本八戸周辺は丘陵地の端で　起伏のある狭い街の中心地が続く。10分ほどでこの市街地をぬけ、郊外の丘陵地に広がる住宅街　中居林へ。　中居林の分れから南へ。

丘陵地を登って丘を回りこみながら乗り越すと、丘が連なり、その斜面に畑が広がる丘陵地の真っ只中。
左手の丘陵地との谷間を新田川がみえ、川に沿うように下ってまもなく信号のある大きな十字路へ。　その十字路の際に「縄文の郷　是川」の大きな看板があり、その十字路を越えたところが是川縄文学習館のバス停で、右手丘側に是川中居遺跡の標識があり、復元された竪穴式住居が木々の間に見え、その奥に縄文学習館が見える。　本八戸からタクシーで 20 分足らずだった。

南から流れ下る新井田川
左　風張の丘陵地　　右　是川遺跡

縄文の里の看板
是川遺跡　縄文学習館前の十字路

縄文学習館入口　　縄文学習館前広場に復元された風張遺跡型竪穴住居
是川遺跡　中居遺跡の中にある縄文学習館前　　*2008. 10. 30.*

南から北へ流れる新井田川の岸になだらかなスロープを描いて畑が広がる丘陵地の東斜面の一番下　川岸のところに小さな集落の家々に取り囲まれて、是川遺跡の中心部　是川中居遺跡があり、その一角が縄文館の敷地。是川遺跡を代表する縄文晩期の数々の漆塗りの木工品・土器が出土した場所である。この土地の所有者であった人たちの見識ある発掘と出土品の保管により、大正時代からの発掘の記録や縄文を代表する貴重な出土品が散逸することなく、今も見られる貴重な遺跡でもあると言う。
この多数の出土遺物のうち 633 点が重要文化財に指定された。(1962)
　また、1999 年からの発掘で新たに漆塗りの木工品・木柱・植物を編んだ網代などが多数発掘されると共に、縄文墓域や縄文後期の竪穴住居や弥生前期の竪穴住居など、居住域が明らかになりつつあり、また、同時に向かいの丘から縄文中期の環状大集落風張遺跡も出土し、両遺跡の関係などが縄文の見事な漆製品と共にさらにクローズアップされるに至った。
是川遺跡・風張遺跡の発掘概要は別項「是川遺跡・風張遺跡の概要」にとりまとめましたので、そちらをご覧ください。

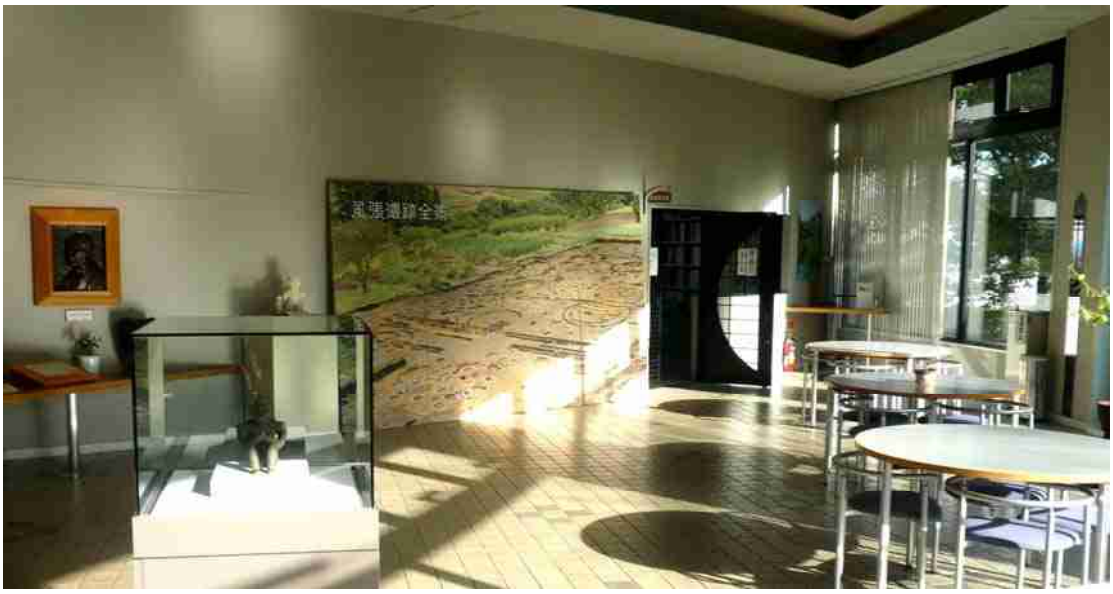
是川中居遺跡の中心部　縄文学習館　全景

2、是川の里　是川縄文学習館　展示見学抜粋

入口から奥へなだらかな登りの小道が延び、その両側に紅葉した木々が立ち並ぶ林に整備された園地。　右側の林に川を挟んで向いの丘陵地にひろがっていた縄文中期の大集落風張遺跡で出土した竪穴住居が復元されていた。　この園地一帯から数々の漆遺物が出土したはずであるが、今は園地に整備されてよく分からない。そして、この奥へ 50m ほど行った所に校倉造を模したコンクリートでできた白色の歴史資料館と円形の形をした縄文学習館が建っていた。

是川中居遺跡が眠る縄文学習館前の園地　　*2008. 10. 30.*

まだ、8 時 30 分過ぎ　開館されていないだろうと思いながら、縄文館へ行くと「どうぞ　どうぞ」と歓迎で入れてもらえた。
　エントランス正面の壁全面に風張遺跡の発掘された竪穴住居群跡の写真があり、一番先に眼に入った。
是川遺跡の数々の漆遺物と共に一番見たかった環状集落住居群の発掘時の写真である。
以前　資料で見た配置図は不鮮明で半信半疑。　ぜひとも今回は見たかった写真である。



縄文学習館エントランスに風張遺跡の発掘住居群遺構のパネルと出土した合掌土偶が飾られている

縄文の心を映すといわれる円環・サークル
そんな中で　先祖が眠る墓域がある広場を真ん中にそれをぐるりと取り囲んで住居が建ち並ぶ環状集落
心優しい縄文人の精神生活をよく表していて、「心優しき日本人の心のルーツ」でもある。

縄文館エントランスにある風張遺跡全景パネル　　2008. 10. 30.
中央部白線で囲まれた場所が墓域（２ケ所）で　それを取り囲んで竪穴住居群が建ち並ぶ

白く囲まれたところが墓孔で　南北に２ケ所あり、それを掘っ立て柱建物が取り囲み、その外を竪穴住居が取り囲んでいる。
縄文中期の環状の大集落で、この風張遺跡では竪穴住居は円形である。復元された案内板には住居の縁に円形の孔が取り囲んでおり、円形だったと記されていましたが、本当に円形なのである。
発掘された住居跡がこんなにきれいに円形で発掘されているのを見るのも初めて。
　「中央部白線で囲まれた場所が墓域（２ケ所）で　それを取り囲んで竪穴住居群が建ち並んでいる」と聞く。説明していただいて　おぼろげながら環状のように思うが弧の写真ではよく分からない。また、この風張遺跡の発掘跡の写真は縄文中期から

弥生の時代までの住居跡が混じっているので、その取り除き作業など、風張遺跡の報告書取りまとめ中だと教えていただいた。
発掘時の遺構配置図の欠かれた資料を重ね合わせて　環状であることが理解できる。
「風張遺跡は　川を挟んで直ぐ向こう。でも　もう今は長生園の老人ホームが建っていて、環状の住居跡は見られない」と。
もう　環状の集落跡は埋め戻されているだろうとは思っていましたが、「ええ　やっぱり・・・」と。
　でも　しっかりした環状の住居跡群発掘図をもらえ、直ぐ向かいの丘へ登れることが分かったので満足。
ひとしきり、風張遺跡や是川遺跡の発掘などの話を色々教えてもらって、是川遺跡・風張遺跡のアウトラインが頭にはいった。
ちょっと是川遺跡や風張遺跡の距離感と道の状況がわからず、それもあって　朝早く飛び出してきたのですが、風張遺跡や是川３遺跡の位置関係もわかった。　これだったら、頭にあった午後一戸の御所野遺跡に行って　盛岡まで出られそうだ。

　　この縄文館・考古館で是川遺跡や風張遺跡の展示と出土遺物を見学して、この中居遺跡遺構を見てから東に丘陵地を登って一番上にある是川遺跡の記念碑から是川遺跡全景と風張遺跡の遠望。
　　そして　再度この縄文館のところまで、下って、新井田川から橋を渡って向かいの丘を登って風張遺跡へ。
　　そこから　さらに丘の頂上部に登って、是川団地/本八戸のバスで八戸市街地へ出て八戸博物館へ。
　　昼過ぎまでに新幹線八戸へ出れば、一戸の御所野遺跡へ行って　盛岡まで行ける。

色々資料をもらって、縄文学習館と隣の歴史資料館・考古館の展示見学に入る。
縄文学習館は映像、ジオラマ等により縄文時代の暮らしや文化そして是川遺跡の概要ならびに出土遺物を紹介するとともに、考古学教室、体験学習の講座も開催するなどを通して、縄文文化や是川遺跡の啓発ならびに地域活動のセンターとなっている。
また、是川考古館・歴史民俗資料館には、是川遺跡から出土した土器、石器、木製品、漆器などの貴重な遺物を展示しており、その多くは国の重要文化財に指定されている。
是川遺跡の概要や発掘遺物などについては別項「是川遺跡・風張遺跡概要」に示したが、この縄文学習館ならびに是川考古館・歴史民族資料館に展示されていたパネルや遺物の中から、是川遺跡・風張遺跡 Walk に関係し、うまく写真のとれたものをご紹介。　他項との重複お許しください。

● 是川遺跡を代表する多数の縄文漆の植物質遺物を出土した泥炭層

是川中居遺跡から大量の漆塗りの木工品・土器を出土した「特殊泥炭層」

1926（大正 15）年に特殊泥炭層が発見され、そこから多量の土器をはじめ普通の遺跡からはほとんど発見されない植物質の遺物（へら形木製品や漆塗りに腕輪など）がまとまって見つかった。木製品などの植物性遺物は、通常は地中で腐ってしまうが、ここでは水につかった状態の泥土が「天然の冷蔵庫」の役割を果たしたことで、腐らずに残っていた。
その後も赤漆塗りの弓、木刀状の木製品、藍胎漆器などが相次いで出土した。

大量の漆塗り植物遺物を出土した場所がどこなのか　興味深々でしたが、パネルの地図から入口からこの建物が建っている場所へと続く小道の南側の部分全体に泥炭層が広がり、この敷地の一番南側の端で集中的に出土している。
地形的にはちょうどこの敷地のところが新井田川左岸の一番低い場所であり、川がこの遺跡に隣接する北側の十字路のところで大きく東へカーブして流れ下っていることから、この地点が古くから湿地として維持され、葦や樹木の葉や実が堆積し、泥炭層を形成したことのだろう。この泥炭層にはクルミ、トチ、ナラの実が数多く含まれているという。

● 是川遺跡の中心　中居遺跡の発掘調査のまとめ

縄文学習館展示・平成 14 年ならびに平成 16 年度発掘調査資料・縄文ファイル等より概要まとめ

A区　近代以降らしい家屋の柱穴、ゴミ穴が多数見つかっている。（1999 年度調査）
B区　A区の東側で、その東端部は史跡指定地にかかっている。配石構遺の一部、周囲から弥生前期の砂沢式土器を配石構遺の一部、周囲から弥生前期の砂沢式土器を得ている。（1999 年度）
C区　（南北 25 m・東西 3 m）平成 5 年に八戸市教育委員会が試掘調査をした場所で、その時厚さが少なくとも 30 cm ある堅果類中心の植物遺体層を確認。D区と同じような状況の遺物の捨て場を検出。
調査区を南側に延長し、新たに地形が落ち込んでいることが判明し、その部分も遺物の捨て場。（2000 年度）
D区　（南北 25 m・東西 3 m）南端が湿地帯で昭和 3（1922）年の大山史前学研究所の調査区に隣接した所である。木製品、土器、石器等が多量に投げ捨てられてできた縄文時代晩期前葉の遺物包含層が見つかる。
沢地が遺物の捨て場（1999 年度）
E区　（約 9 m²）花粉分析資料のための小規模な調査区。晩期中葉の土器確認（2000 年度）
F区　（約 140m²）C区で発見した北側の沢および捨て場の延長を確認した。捨て場から縄文時代晩期前葉と見られる大量の土器が見つかった。またC区で発見した植物遺体層は発見されなかったため、C区とF区との間で植物遺体層は途切れている考えられる。(2002 年度)
G区　（約 2000m²）中期末、弥生前期と考えられる竪穴住居跡や埋設土器、土器、石製品などが出土。(2002 年度)
H区　（約 96m²）沢と泥炭層確認のための調査。南の沢の幅は 8 ～ 9m と推測される。沢に平行して人為的な溝も確認された。また、赤漆塗りの「弓」や「腕輪」、「編み物」「サメの脊椎骨」など出土。（2002 年度）
I区　（約 150m²）1974 年に調査された場所。当時は、後期・晩期の墓 4 基と人骨 8 体が確認されている。今回の調査では、墓 2 基などが出土している。（2002 年度）

2003　遺跡北側の P 地区からは縄文中期中葉の住居跡が見つかり、地域のまとまりが見えてきました。「南の沢」の東に設定した O・Q 地区では沢に向かって傾斜下地形を盛土整形、配石遺構などを作っていた。遺跡南西の弥生前期のお墓のほかにも、中央の K 地区から同時期の楕円形の土坑墓や土器棺墓が見つかり、土坑墓のひとつから玉 61 点と石鏃 3 点が出土。

1. 遺跡の南側には深さ 2m 以上の 2 本の沢が東西方向に伸び、現在　はなだらかな傾斜地であるが、当時は起伏のある地形で、数多くの植物質遺物が出土する特殊泥炭層はこの沢を埋めるように広がり、その窪地に縄文晩期はじめの生活道具や食料残滓が捨てられていた。食料としてのトチ・クルミの殻は一番多いところで約 80cm の厚さに積もっていた。

また、遺跡の北側　長沢地区にも河川の跡が見つかり、遺跡北側にも　大量の遺物が捨てられていることが、わかった。

2. 遺跡中央の台地部分には縄文時代後期から晩期の住居跡赤く塗られた人骨が埋葬されていたお墓が作られていた。
3. 遺跡西側には　弥生時代前期の竪穴住居や砂沢式の甕を使った土器棺墓が作られ、遠賀川時がまとまって出土。
このことから、中居遺跡は弥生時代に入っても中心的な集落だったかも知れない。
――― 縄文学習館展示・平成 14 年&平成 16 年度発掘調査・縄文ファイル等資料より　是川遺跡発掘調査まとめ

縄文文化を代表する数々の縄文漆遺物を出土した是川遺跡の集落については　今まで　ほとんど報告を知らず、どんな集落なのかよく分かりませんでしたが、墓域や居住域が明確になってきたことなどから、大量の漆遺物や土器を出土した是川中居遺跡の集落としての性格が明らかになりつつあり、また、大量の漆遺物を出土した特殊泥炭層の地形的性格もほぼ解明されつつあり、集落全体の形もおぼろげながらわかってきた。

中居遺跡の集落の位置をまとめるとこんな風になるのでしょうか???

南北に流れ下る新井田川が右へカーブする手前の左岸に低湿地が広がり、その上の台地に作られた中居遺跡。
この台地から川まで、現在建物の建つ中央部の少し西奥から川までの緩やかな傾斜地に泥炭層が広がり、かつてこの場所は川が右へカーブする地点で絶えず水と接する地点である。
現在は新井田川の左岸の緩やかな傾斜地であるが、中居遺跡の集落があった縄文時代にはもっと起伏があり、この台地の南端には小さな沢が湿地へと続く。また、北側にも川が流れ遺跡の北側を区切る。
そして　現在縄文学習館や歴史資料館が建つ中央部がこの遺跡の居住区で、墓域と竪穴住居が集落を構成して、縄文後期・晩期から弥生　そして古代から江戸期へとこの中央部の中でその居住区を変えながら集落が続いてゆく。
漆遺物や土器・土偶と数多くの遺物を出土した縄文晩期の集落は現在の縄文学習館が建つ場所から北に居住区があり、その前や南側に墓域があり、弧の墓域は弥生時代にはさらに南へ伸び、ちょうど湿地を弧状に取り囲むように集落があり、南端の沢と北の川が集落のゴミ捨て場になっている。漆遺物や土器・土偶など大量の遺物が出土したのが南の沢。
また最近北の川のところからも多数の異物が見つかっている。

この中居遺跡が対岸の丘の上にある中期の環状大集落風張遺跡との関係も大いに興味がわく。
二つの集落のつながりはどうなのだろうか・・・・
縄文中期の大集落がほぼ終わる頃に直ぐ対岸の新井田川の川岸の湿地の上の台地でこの中居遺跡が大きくなり、縄文文化の華といわれる縄文漆遺物など数々の遺物を残す。
また、縄文人の住む高台の森から　弥生人は水辺近くへと住処を変えてゆく。
丘陵地の高台に居る風張遺跡の人たちが　水辺へ移っていったのだろうか・・・・
風張遺跡では　竪穴住居の中から、一粒ではあるが、炭化米が見つかっている。
縄文後期　風張の縄文人は　もう米の情報を持っていたのか?
また、縄文の典型的な環状集落から縄文晩期を経て弥生の集落への変遷過程も気になる。
この縄文晩期の是川中居遺跡では　まだ、環状集落が維持されているのだろうか・・・・
弥生の村への変遷が見られるかもしれない。
今後も　新しい発掘・発見に期待したい。

● 縄文の漆

縄文晩期　北東北に花咲いた亀ヶ岡文化を代表する是川・亀ヶ岡遺跡の漆遺物

（　右写真の上段は是川遺跡出土遺物のレプリカ）　　「縄文の漆」より

是川中居遺跡から出土した縄文を代表する数々の漆遺物

この漆はこの是川の里に自生していたと思うのですが、どんな風だったのだろうか・・・。

この八戸へ流れ下る馬渕川流域の上流岩手県側に入った御所野縄文遺跡のある一戸の隣町　二戸浄法寺は現在も「浄法寺漆」の産地。　漆の全国生産の 60%をしめ、その質が良いことから国宝や重要文化財の修復に用いられ、古くから林に入って漆を採取したようだ。

縄文館で見せていただいた「縄文の漆」（御所野遺跡作成）の資料にも詳細にもこの地方の漆や是川遺跡出土の漆遺物の復元写真が詳細に示されていました。

漆は日本が発祥 ??　　「漆」は　縄文時代の早期から技術が育まれていた

一戸　御所野遺跡で復元されていた漆の林と　漆掻き　　2008. 10. 30.

右端の写真に一度見たかった漆掻きの横線が何条も幹にはいっているのが、見えます

亀ヶ岡文化と呼ばれる縄文晩期　是川遺跡　出土の数々の出土遺物

赤漆塗り弓出土状況

木胎漆器出土状況

漆塗り樹皮製容器出土状況

漆塗り盆

漆塗り装飾品と漆し布
（重要文化財）

是川遺跡から出土した漆遺物

亀ヶ岡式土器（重要文化財）

是川遺跡からは漆で彩色されたものを含め　多彩な土器が出土　亀ヶ岡式時と呼ばれる

是川遺跡から出土した土偶

2、中居遺跡から一王寺遺跡を通って記念碑へ

是川の里　全景図　　internet 航空写真より

縄文学習館を出て歴史資料館に入るとちょうど小学生たちが館内にいて、案内のボランティアが「この歴史資料館に飾ってある遺物はみんなほんもの。　それも　国宝・重要文化財にしてされているものやそれに等しいものばかり。　こんなに近くでみられるのはここだけよ。　よく　見て帰ってね」と本当に誇らしげに案内している。

本当にそうだと思いました。

満足感いっぱいで、縄文学習館を出て、遺跡の前庭に出る。

この前庭全体が今は綺麗になだらかな傾斜に整地されてよく分からないが、この前庭の東部分の地下は泥炭層が広がる新井田川の元湿地で、もっと起伏があったのだろう。ここで暮らした縄文人たちは　この湿地に降りて、川へでたのであろう。

また、建物に近い部分には　弥生前期の土坑墓や土器棺墓の調査地点と思われるが園地に整備されていてよく分からない。

前庭南東端

建物前の前庭　中央部

建物前の前庭　中央部

居遺跡の中央部　地下に泥炭層が広がる前庭　かつての湿地と高台との境の周辺

入口まで戻って　縄文学習館で教えてもらったとおり、遺跡の南端の垣に沿って傾斜地を真っ直ぐ登る道に入って、まず　遺跡の南端中央部　大量の漆遺物の出たところを見て、さらに　一王寺遺跡を通って、遺跡全体が見渡せると言う記念碑へ。　入口を出て遺跡の生垣に沿って南角から西へ集落の中を傾斜地の上へ登る道に入る。　少し、登ると道が西に折れ曲がって、真っ直ぐ西への道。

　生垣の内側に広い草地が見え、その奥に考古館の白い建物が見える。

　この草地の手前は縄文の頃には浅い沢になっていて、中居遺跡の集落のゴミ捨て場で大量の漆遺物や土器が出た場所である。

写真では傾斜がよく見えないが、北東側にかなりの傾斜である。

もっと起伏があったのだろうが、きれいに埋め戻されて整地されていて、ここに沢があったようには見えない。

中居遺跡の南端側　西から北東（写真の中央方向）に傾斜した草地　　*2008. 10. 30.*

この草地の手前側の下に大量の漆遺物などを出土した沢が埋まっている

草地にはいると、ふわふわで、草が敷き詰められたような感じである。また、上記写真のすぐ西に畑状の地があり、ここは足を踏み入れるとぬかるんでいて、靴が沈み込んでゆく。　いずれも　もう発掘調査により掘り返された場所と思われるので縄文時代から続く泥炭層が顔を出しているとは思えないが、草地全体がやわらかく泥炭地の名残かも知れない。

元の道にもどり、さらに西へ。是川遺跡記念碑の案内標識が中居遺跡の西南の角に立ち、それを過ぎると立つ見渡す限り畑の田園地帯のまっただ中。　南北に伸びる丘陵地の東斜面全体が畑に切り開かれているのが見え、その中を真っ直ぐ正面の丘陵に向かって道が続いている。　　この道の両側の畑の中に是川一王寺遺跡が眠っている。

中居遺跡の南端の生垣に沿って　真っ直ぐ西の丘陵地へ上る道　　*2008. 10. 30.*

まもなく　道の際に小さな杭が立っていて、其処に一王寺遺跡と書かれていて、この周辺に遺跡が眠っていると知れる。縄文前期から中期の遺跡で、平底バケツ型の土器が沢山出土し、それがきっかけとなって、円筒土器の名前がつけられた経緯がある遺跡である。
あまり　登ったとは思えないのですが、振り返ると畑の向こうに中居遺跡の森や南北に流れる新井田川　そして　川に沿って対岸を走る丘陵地が見えている。
遺跡はどこに眠っているのかよく分からないが、のどかな田園風景が広がる。

是川一王寺遺跡出土の円筒土器

丘陵地を登る道を登りながら　南東方向　　是川遺跡　記念碑前より一王寺遺跡を見下ろす

縄文前期-中期の是川一王寺遺跡周辺　それを示す杭が道端にあるのみで田園風景が広がる

一王寺遺跡からもう少し登り、開墾された田畑地帯と丘陵地の森の境のところに展望台が整備され、其処に大正時代始めてこの是川遺跡をみつけ、発掘・保存を精力的に進めた泉山翁の顕彰と是川遺跡の意義を書き記した是川遺跡記念碑があった。

　　ここからは　今登ってきたゆるやかな傾斜地に広がる田園地帯を前景に是川の里とその背後の新井田川と丘陵地が緑の帯となって東西に伸び、さらにその奥遠くにただ一線で八戸の市街地そして右端に種市岳がポツンと浮いている。
この向こうには遠く太平洋が広がっているのですが、高度が低いので　海は見えない。

是川遺跡　記念碑前から縄文の里「是川」遠望

右端に遠望されるのが種市岳　おそらく是川にすむ縄文人たちのランドマークだったろう

縄文人もこんな景色を見たのだろうか・・・・おそらく、今　田園が広がるこの丘陵のスロープも緑の森が埋め尽くしていて、ランドマークとして　種市岳がぽっかり浮いていたのだろう。ここでも　やっぱり　縄文人は素晴らしい風景の森に集落を営んでいる。

舗装道路や自動車やコンクリートの大きな建物など邪魔するものが全く無いのどかな田園風景がいい。
是川中居遺跡の森の背後の丘陵地の中に青い屋根が見えるのが　縄文中期の合掌土偶が出土し、環状の大集落が営まれていた風張遺跡の上に建つ老人施設長生園。新井田川を挟んで直ぐの丘陵地との上である。

是川遺跡記念碑

是川の里　全景図　　internet 航空写真より

縄文中期の是川掘田遺跡と晩期の是川中居遺跡が新井田川そばの川岸の台地にあり、この川の両側の丘の上に縄文後期の風張遺跡と中期是川一王時遺跡。　縄文中期温暖な気候の中で、森の恵みに重きをおいた生活をしていた縄文人がその後の寒冷化によって、生活の主体を川・海依存を深めて、川岸へ降りていったのか・・・・

是川中居遺跡からは弥生前期の遠賀川式土器も出土しており、新井田川から海へ　周囲を丘に囲まれたこの是川から新井田川を伝って　外との交流が見て取れる。
眼前に広がる縄文の里「是川」と地図を見比べながら、しばし、勝手な空想を楽しむ。

3.　新井田川を渡って風張遺跡へ

是川遺跡・風張遺跡の発掘概要は別項「是川遺跡・風張遺跡の概要」もご覧ください。

ひとしきり展望台で景色を楽しんだ後、もと来た道を戻って、縄文学習館の入口に戻る。
ちょうど　10 時　今回の Walk で是非とも訪れたかった風張遺跡に向かう。

風張遺跡は縄文後期の典型的な環状集落で、竪穴住居 184 棟、掘立て柱建物 19 棟、土壙墓 127 基、土壙 1367 基が検出。すごい数である。長年をかけてではあるが、すごい数の住居が墓のある広場を中心に環状に整然と配置され、何百年も維持され、縄文の暮らしが新井田側に張り出した尾根の端で営まれた。（一部ほかの時代の遺跡が重なっている。　詳細は別項「風張遺跡概要」をごらんください。）。　そして　縄文晩期になってこの丘の上の環状集落が消滅していく中で、対岸の水辺の高台に漆文化の花を咲かせた是川中居遺跡が起こってくる。また、この風張遺跡の住居群の中から　祈りのポーズともお産の形とも言われ、しかも折れた膝のところがアスファルトで接合修理された「合掌土偶」が出土した。
縄文人の心　心やさしい日本人の心のルーツを映すといわれる環状集落と大事に扱われた「合掌土偶」。
円や渦巻き紋様と共に縄文人の精神生活を表す典型と強く惹かれてきました。
私の見た風張遺跡の環状集落の配置図はなんどもコピーされ、不鮮明なもので半信半疑。
ぜひともきれいな図でものでで、環状集落を考えたいと。

縄文学習館で発掘時の環状集落の遺構配置の写真や出土した合掌土偶にも 1 年ぶりに再会もたし、また、風張遺跡の特徴ある円形の竪穴住居も学習館前の庭に復元されていました。（縄文学習館にある合掌土偶はレプリカ　八戸博物館に実物がありました）
「風張遺跡の今は案内板があるだけで　何もなし。　行かれても・・・・」と聞いて、ちょっとがっかりですが、どんなところだったのか　是非行ってみないと。

縄文館エントランスにある風張遺跡全景パネル　　2008. 10. 30.
中央部白線で囲まれた場所が墓域（２ケ所）で　それを取り囲んで竪穴住居群が建ち並ぶ

風張遺跡の「合掌土偶」

余談ですが、風張遺跡の「合掌土偶」は昨年　大阪であった青森まほろば博で見たことがあります。
縄文のお産を示したものだとの説もある土偶ですが、ちょうど膝のところが壊れていて、ここを縄文人がアスファルトで接合修理していると聞いて　接合屋の私にはさらに身近になった土偶。一部欠けて出土するものが多い土偶は「祈りとして、欠くのだ」との説が通説ですが、この土偶はアスファルトで修理し、しかもゴミ捨て場から出土したものでな、住居跡から出土した土偶です。

中居遺跡北の十字路を東へ新井田川に架かる橋があり、それを渡って、向かいの丘陵地に登ってゆく道が伸びている。
この道を真っ直ぐ登ってゆけば、風張遺跡の眠る長生園を経て丘陵地の上へ出る道である。歩くにはちょっときついなあと思いつつ歩き出す。また、交差点の直ぐ北側の奥　田圃が縄文中期の掘田遺跡である。
　橋からは長生園の青い屋根が見えているので、それを目指して歩く。

新井田川を渡り、東の丘側から中居遺跡側を遠望

中居遺跡横の交差点より北側　奥が掘った遺跡

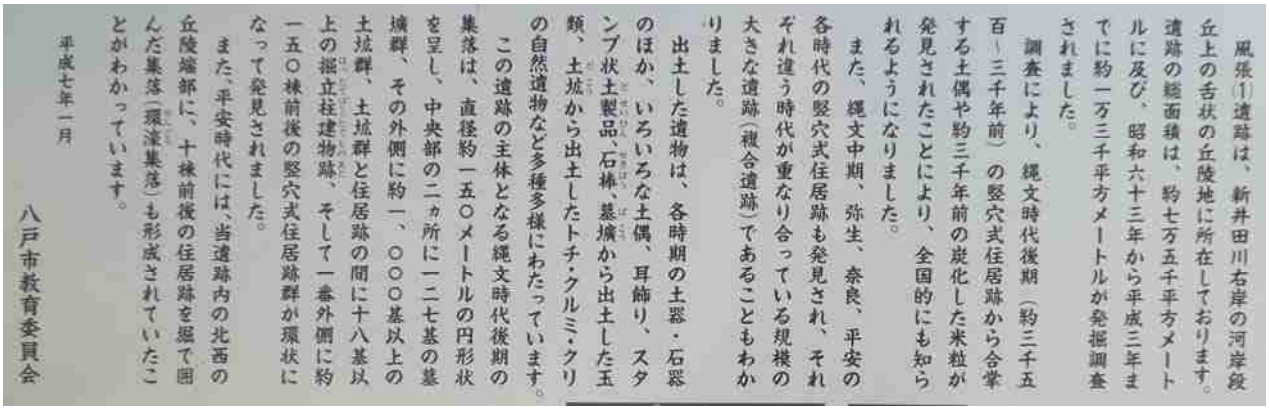
是川中居遺跡から新井田川の橋を渡って　風張遺跡のある丘陵地へ　　*2008. 10. 30.*

橋を渡って、急な坂道を登ると Y 字路になっていて、その Y 字の上が風張遺跡があった新井田川に張り出した尾根の先端。
建物が見えているのですが、左側から回り込んでこの尾根筋へ登ってゆく。
　直ぐ　尾根の上へでられると思いましたが、切通しの中を真っ直ぐのきつい坂道が続く。
ぶらぶらと登って 20 分ほどで、一段上の丘にあがって、視界がひらけ、この道の右手に長生園の建物が見え、入口の直ぐ横に風張遺跡の案内板が立っていました。

風張遺跡へ登る道のきつい切通し道

きつい切通しを登りきると丘陵地の中段視界が開け、長生園の建物と風張遺跡の案内板がありました

風張遺跡が地下に眠る長生園　　2008. 10. 30.



風張(1)遺跡は、新井田川右岸の河岸段丘上の舌状の丘陵地に所在しております。遺跡の総面積は、約七万五千平方メートルに及び、昭和六十三年から平成三年までに約一万三千平方メートルが発掘調査されました。

調査により、縄文時代後期（約三千五百～三千年前）の竪穴式住居跡から合掌する土偶や約三千年前の炭化した米粒が発見されたことにより、全国的にも知られるようになりました。

また、縄文中期、弥生、奈良、平安の各時代の竪穴式住居跡も発見され、それぞれ違う時代が重なり合っている規模の大きな遺跡（複合遺跡）であることもわかりました。

出土した遺物は、各時期の土器・石器のほか、いろいろな土偶、耳飾り、スタンプ状土製品、石棒、墓壙から出土した玉類、土坑から出土したトチ・クルミ・クリの自然遺物など多種多様にわたっています。

この遺跡の主体となる縄文時代後期の集落は、直径約一五〇メートルの円形状を呈し、中央部の二ヵ所に一二七基の墓壙群、その外側に約一、〇〇〇基以上の土坑群、土坑群と住居跡の間に十八基以上の掘立柱建物跡、そして一番外側に約一五〇棟前後の竪穴式住居跡群が環状になって発見されました。

また、平安時代には、当遺跡内の北西の丘陵端部に、十棟前後の住居跡を掘て囲んだ集落（環濠集落）も形成されていたことがわかっています。

平成七年一月

八戸市教育委員会

風張遺跡の概要を記した案内板

風張遺跡の丘に登れば　新井田川を挟んで、風張遺跡のある丘の先端部から是川遺跡側が見通せると思っていましたが、残念ながらこの道筋からは見通せませんでした。　長生園の中へ入れば　見通せたのでしょうが、見送り。
是川遺跡記念碑で眺めたのと同じような真ん中を南北に流れ下る新井田川　そして、ちょうど対岸には　丘陵地の森をバックに川へ出られる湿地を下に持つ高台が見える。
この風張の縄文人たちには　魅力的な場所にみえたのではないだろうか・・・・

時間は 10 時半　再度　中居遺跡に引き返してもバスを捕まえられそうに無い。　長生園で聞くとこのまま坂を上りきったところで路線バスに乗れると聞いて、そのままこの丘を登りきる。志民のバス停で時間調べるが、駅方面のバスなし。
やはり　本数が少なく、ちんぷんかんぷん。とにかくこの尾根筋を下ってどこかでバス捕まえるか　タクシー探そうと丘を北へ向かって歩き出す。15 分ほど歩いて　八戸南環状道路の八戸是川 IC のところでタクシーが捕まえられたので、やれやれ。
八戸市街地をつききって、八戸博物館にたちより、其処からバスで新幹線八戸駅に 12 時過ぎに到着できました。

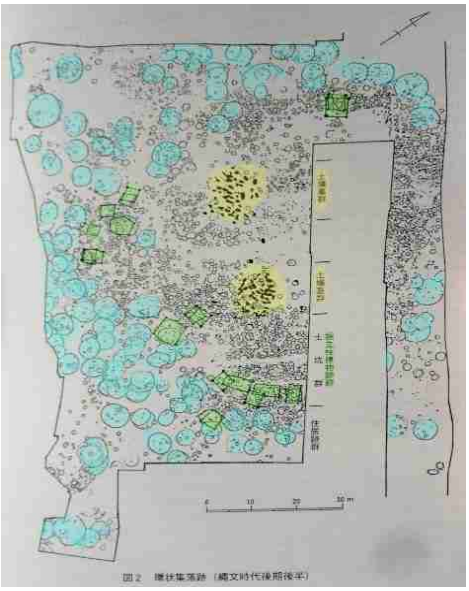
4.　まとめ

是川遺跡の「漆」と風張遺跡の環状集落　是非見たかった東北の縄文。
念願かなってやっと見ることができました。
縄文文化の華開いた「是川」はどんなところだろうか・・・・興味津津で訪れた是川は八戸の郊外　田園地帯が広がる丘陵地
静かな田園地帯の Country walk が楽しめました。
　朝早くからの駆け足の半日でしたが、行きたかった場所に全部立つことができました。

是川中居遺跡にある縄文学習館・歴史資料館に収蔵されている是川遺跡の遺物の多さにもびっくり。
ボランティアの人が誇らしげに、「展示された出土品は国宝・重文級でどれも　本物だよ」と。
本当に素晴らしい遺物がありすぎて・・・・。 かえって　あれもこれも見たと印象が薄くなり勝ち。

丘陵地を登って是川遺跡の記念碑前から眺めた縄文の里「是川」には
ゆったりとした時間の流れる素晴らしい Country 風景
丘の上にある環状の縄文集落　風張遺跡　環状の跡が見られるかもとひそかに期待もしていたのですが、やっぱり建物が建っていました。 また、こちらへ来るまで、あまり意識していなかったのですが、　風張遺跡は　環状集落であるだけでなく、竪穴柔柄居まで大半が円形。 そして　それが　そっくり　縄文学習館前に復元されていました。
私の頭には無かった縄文の集落風景でした。

縄文を代表する環状集落には、縄文の精神生活があらわれているといわれ、
「心優しき日本人」のルーツと言われる。
　どこか一箇所でいいから、
　環状集落全体の復元したモニュメントが作られないだろうか・・・・
　それが　広島と一緒で　平和を考える日本の素晴らしいモニュメントに
　なると思うのですが・・・
今回　縄文学習館で　風張遺跡について　色々話が聞けて、うれしいひと時でした。 やっぱり、　縄文のサークル追いかけようと。



また、今まで、漆遺物など出土品ばかりに眼が行って、集落の様子をあまり知りませんでしたが、おぼろげながら 是川遺跡の集落が見えてきたのも収穫。
でも　まだ、ばっちりとしたレポートが無く、現地にもそんなパネルも無いので、速く整備されればと願っています。

新しい発掘で色々判ってきたのか、是川中居遺跡は現在の縄文学習館や歴史資料館が建っているあたりが、縄文晩期の集落の中心らしい。 また、現在平らな斜面に整備されている南北の端が沢や谷川になっていて、其処が縄文人のゴミ捨て場。
まもなく、　この中居遺跡の北西の一角に新しい是川博物館が建つらしいのですが、全体の遺跡をすっきりと復元保存して欲しいと願っています。
また、今回　縄文学習館の方々には　たいへんお世話になりましたが、大きくなり設備が整ってくると日々訪れてくれる人への対応を今までどおりに。是非現在のボランティアを含めた活動が維持されますよう。
ちょっとびっくりした八戸博物館の姿勢に疑問を感じて・・・・。

また、外から訪れるものにとって、もう少し交通アクセスなど判り易くなるとうれしいです。

「縄文人は素晴らしい自然の景観が見晴らせる森に集落を作っている。訪ねると素晴らしい自然にも出会える。」
これが、縄文の旅の楽しみの一つ。
今回の縄文の里「是川」も。
　丘の上に居た風張の縄文人が、丘の下をゆっくり流れる水辺に下りてきて、新しい生活を始め、漆の素晴らしい文化を花咲かせた。米もひょっとして　つくりはじめたかも・・・
太平洋の海原へと続く東には　種市岳がそれをゆったりと見守って、静かな時が流れる。
そんな　素晴らしい場所でした。

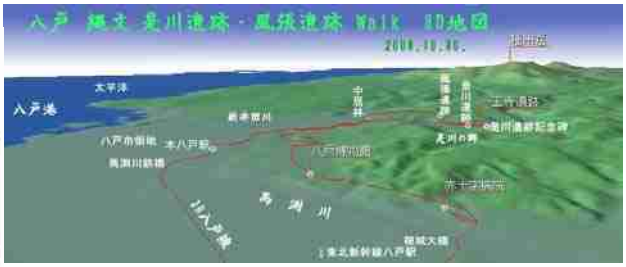
13 時前　満足感に浸りながら　岩手銀河鉄道で一戸の御所野遺跡へ。

2008.10.30.午後　　八戸から岩手銀河鉄道にのりこんで、

by Mutsu　　Nakanishi

【参考資料】

1. 東奥日報 HP「是川遺跡」　http://www.toonippo.co.jp/kikaku/korekawa/index.html
2. 縄文ファイル　2003.6.1.「是川遺跡　伝わってくる縄文人の豊かな感性」小久保卓也
3. 「八戸市　是川中居遺跡　　平成 14 年の発掘調査から　」小久保卓也
   青森市　平成 14 年縄文講座「縄文人の台所･水さらし場を考える」
4. 「是川中居遺跡　平成 16 年度発掘調査　」平成 16 年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会　資料
5. 「風張遺跡の縄文社会」特別展　　八戸市博物館
6. 縄文の漆　　御所野遺跡編



青森・八戸　縄文の郷　「是川」に 縄文文化を代表する是川遺跡・風張遺跡を訪ねる

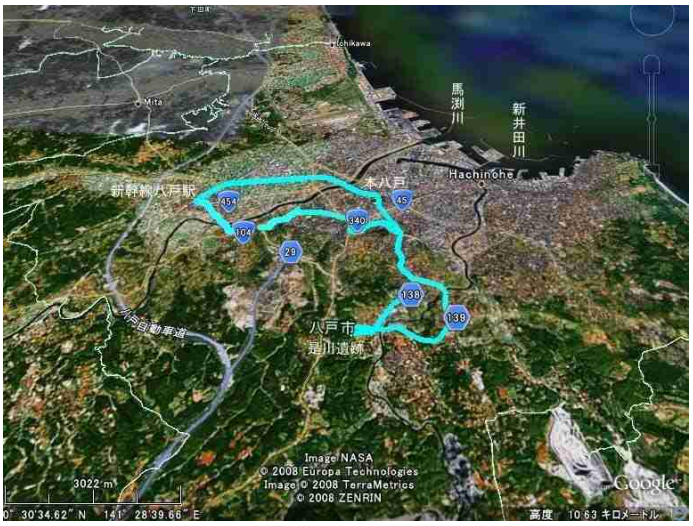
[参考] 資料による是川遺跡・風張遺跡概要

1、 是川遺跡 概要

資料抜粋まとめのベース資料

1. 東奥日報 HP「是川遺跡」 http://www.toonippo.co.jp/kikaku/korekawa/index.html
2. 縄文ファイル 2003.6.1.「是川遺跡 伝わってくる縄文人の豊かな感性」 小久保卓也
3. 「八戸市 是川中居遺跡　　平成 14 年の発掘調査から 」 小久保卓也
   青森市 平成 14 年縄文講座 「縄文人の台所・水さらし場を考える」より
4. 「是川中居遺跡 平成 16 年度発掘調査 」 平成 16 年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会 資料 より

縄文の里　是川　是川遺跡 & 風張遺跡



是川遺跡の位置と 10. 30. 是川遺跡 walk 行程図

是川遺跡は、八戸市の市街中心部から南へ約 4 キロ離れた所に位置し、新井田川左岸の台地に広がる縄文を代表する遺跡。
特に卓越した赤漆塗りの漆工芸技術を示す植物性遺物(弓、櫛、腕輪、藍胎漆器などの木工品類ほか)や土器など是川遺跡の中心遺跡中居遺跡から出土し 4000 点をこえる出土遺物は工芸的にも優れ、「縄文の漆」を代表する遺跡として全国的に注目される。

是川遺跡の広さは東京ドーム 5 個分に当たる約 245, 000 ㎡で、縄文時代晩期の亀ケ岡文化を中心とする中居遺跡＝約 45,000 ㎡、縄文時代前期－中期の一王寺遺跡＝約 18,9000 ㎡、縄文時代中期の堀田遺跡＝約 1,1000 ㎡の三つの遺跡を総称して是川遺跡と呼ぶ。

新田川は, 岩手県北部北上山地に源をもち, 北流して八戸市で太平洋に注ぐ。遺跡は, その谷あい, 現在の河口から 7 kmほど遡ったところにあり、遺跡は全体が新井田川左岸の低い段丘の上にのっている。また、新井田川をはさんで対岸, 是川遺跡から 500m のところに縄文後期の集落遺跡で, 合掌する土偶が出土したことで有名になった風張遺跡がある。

1. 中居遺跡　縄文時代晩期の 3000 年前から 3200 年前の遺跡

漆塗りの木製品など優れた遺物が良好な状態で多数出土し、縄文時代晩期の代表的な遺跡である中居遺跡は、標高 10－20 メートルの緩やかに傾斜する段丘に位置する。

中居遺跡は 1920 年(大正 9 年)　土地の所有者で八戸在住の素封家泉山岩次郎・斐次郎氏の両氏によって　最初の発掘が行われた。1926(大正 15)年には、特殊泥炭層が発見され、そこから多量の土器をはじめ普通の遺跡からはほとんど発見されない植物質の遺物(へら形木製品や漆塗りに腕輪など)がまとまって見つかった。
木製品などの植物性遺物は、通常は地中で腐ってしまうが、ここでは水につかった状態の泥土が「天然の冷蔵庫」の役割を果たしたことで、腐らずに残っていた。その後も赤漆塗りの弓、木刀状の木製品、藍胎漆器などが相次いで出土。
卓越した赤漆塗りの漆工芸技術を示す植物性遺物(弓、櫛、腕輪、藍胎漆器などの木工品類ほか)や土器など 4000 点をこえる出土遺物は工芸的にも優れ、縄文時代の技術「縄文の漆」を代表するものである。

出土遺物の特徴をまとめると次のとおり。

1.「土器の種類、形態が多種多様。用途に応じ機能的で、完形品が多い」

2.「植物性遺物が多く、特に飾り太刀、弓、くしなど赤く彩色された優れた工芸品が多い」

3.「漆工芸技術が高度に発達していたことを示す籃胎(らんたい)漆器や土器が見られる」

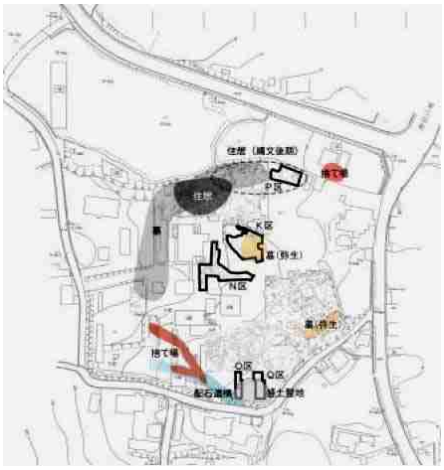
4.「土器、土偶などの造形、文様構成、表現方法が計画的で大胆、繊細。熟練した手法で精巧に作られたものが多い」

遺跡から発見された数々の出土遺物は泉山岩次郎・斐次郎氏の両氏などの努力により散逸することなく守られ、その後　縄文時代の技術「縄文の漆」を代表する遺物として全国的に注目され、1962(昭和 37)年に 633 点が国の重要文化財に指定された。
また、1929(昭和 4)年には東京の大山史前学(しぜんがく)研究所が本格的な学術調査を実施し、泥炭層のたい積状態が詳しく記録され、遺物も土器や石器、植物遺存体のほかに、鹿やイノシシなどの骨や貝類などの動物遺存体も出土することが分かった。

● 戦後は、遺跡に公共施設や道路が造られるのに伴い発掘調査が行われるようになった。
1974(昭和 49)年には、北西側の高い部分から縄文後期の墓坑が発見され、赤い顔料が付いた人骨がみられるものもあった。墓坑は 1993(平成 5)年に縄文学習館を建設する際にも多数見つかり、その東側からは縄文後期ー晩期の竪穴住居も検出された。そのほか、1980(昭和 55)年の遺跡東端の発掘調査では、縄文晩期終末から弥生前期の遺物が発見され、西日本の弥生文化に由来する「遠賀川(おんががわ)系土器」も出土した。

1999 年(平成 11 年)から　さらに公共施設や道路建設に伴い、是川遺跡の範囲・内容確認を目的に中居地区・長沢地区を中心に発掘調査が開始され、漆塗りの木製品や大型木柱、植物を編んでつくった網代(あじろ)など貴重な遺物が多数出土すると共に新しい発見も相次ぎ、是川遺跡の中心である中居遺跡の集落としての性格も明らかになってきた。

● **中居遺跡　平成 16 年度　2003 年　調査報告より　最近の発掘調査要約**



遺構の種類
○竪穴住居跡…縄文後期中葉４棟（Ｐ区）
○土坑墓…弥生時代前期 17 基（Ｋ区）
○土器棺墓…弥生時代前期２基（Ｋ区）
○フラスコ状土坑…縄文時代中期１基（Ｎ区）
○配石遺構…縄文時代晩期以降２基（Ｋ区・Ｏ区）
○溝跡…弥生時代？１条（Ｎ区）
○盛土整地跡（Ｏ区・Ｑ区）

遺物の種類
○縄文時代…中期の土器、後期中葉～晩期後葉の土器、土製品、石器、石製品が出土。
○弥生時代…前期の土器、石器、石製品が出土。
○近世…陶磁器が若干出土。

遺跡の特徴及び注目される遺物
遺跡北側のＰ区からは縄文時代後期中葉の住居跡がみつかり、住居のまとまりが見えてきました。「南の沢」の東に設定したＯ・Ｑ区では、沢に向かって傾斜している地形を盛土して整地し、配石遺構などを作っていたことが分かりました。遺跡南西の弥生前期のお墓のほかにも、中央のＫ区から、同じ時期の楕円形の土坑墓や土器棺墓が見つかりました。土坑墓のひとつから玉 61 点と石鏃３点が一緒に出てきました。

中居遺跡　2003 年度　調査地区と発掘遺構概要

中居遺跡　2003 年度　調査地区と発掘遺構　まとめ

1. 遺跡の南側には深さ 2m 以上の 2 本の沢が東西方向に伸び、現在はなだらかな傾斜地であるが、当時は起伏のある地形で、数多くの植物質遺物が出土する特殊泥炭層はこの沢を埋めるように広がり、その窪地に縄文晩期はじめの生活道具や食料残滓が捨てられていた。食料としてのトチ・クルミの殻は一番多いところで約 80cm の厚さに積もっていた。
   また、遺跡の北側　長沢地区にも河川の跡が見つかり、遺跡北側にも　大量の遺物が捨てられていることが、わかった。
2. 遺跡中央の台地部分には縄文時代後期から晩期の住居跡赤く塗られた人骨が埋葬されていたお墓が作られていた。
3. 遺跡西側には　弥生時代前期の竪穴住居や砂沢式の甕を使った土器棺墓が作られ、遠賀川時がまとまって出土。
   このことから、中居遺跡は弥生時代に入っても中心的な集落だったかも知れない。

1999－2002 年度の調査　まとめ

2002年度までの調査の結果、遺跡の南側には、深さ２ｍ以上の２本の沢が東西方向にのびており、起伏のある地形だったことが分った。泥炭層はこの沢を埋めるように広がっており、その窪地に縄文時代晩期初め（約3,000年前）の生活道具や食料残滓が大量に捨てられている。食料としたトチ・クルミの殻は一番多いところで約80cmの厚さに積み重なっている。

【　中居遺跡　1999-2002 年度　調査　】

A区　近代以降らしい家屋の柱穴、ゴミ穴が多数見つかっている。(1999年度調査)
B区　A区の東側で、その東端部は史跡指定地にかかっている。配石構遺の一部、周囲から弥生前期の砂沢式土器を配石構遺の一部、周囲から弥生前期の砂沢式土器を得ている。(1999年度)
C区　(南北25ｍ・東西3ｍ)　平成5年に八戸市教育委員会が試掘調査をした場所で、その時厚さが少なくとも30cmある堅果類中心の植物遺体層を確認。D区と同じような状況の遺物の捨て場を検出。
調査区を南側に延長し、新たに地形が落ち込んでいることが判明し、その部分も遺物の捨て場。(2000年度)
D区　(南北25ｍ・東西3ｍ)　南端が湿地帯で昭和3（1922）年の大山史前学研究所の調査区に隣接した所である。木製品、土器、石器等が多量に投げ捨てられてできた縄文時代晩期前葉の遺物包含層が見つかる。
沢地が遺物の捨て場（1999年度）
E区　(約9㎡)　花粉分析資料のための小規模な調査区。晩期中葉の土器確認（2000年度）
F区　(約140㎡)　C区で発見した北側の沢および捨て場の延長を確認した。捨て場から縄文時代晩期前葉と見られる大量の土器が見つかった。またC区で発見した植物遺体層は発見されなかったため、C区とF区との間で植物遺体層は途切れている考えられる。(2002年度)
G区　(約2000㎡)　中期末、弥生前期と考えられる竪穴住居跡や埋設土器、土器、石製品などが出土。(2002年度)
H区　(約96m²)　沢と泥炭層確認のための調査。南の沢の幅は8～9mと推測される。沢に平行して人為的な溝も確認された。また、赤漆塗りの「弓」や「腕輪」、「編み物」「サメの脊椎骨」など出土。(2002年度)
I区　(約150㎡)　1974年に調査された地所。当時は、後期・晩期の墓4基と人骨8体が確認されている。今回の調査では、墓2基などが出土している。(2002年度)

2. 平成 14 年度の発掘調査の概要

①G 区の調査

G 区では縄文時代中期のフラスコ状土坑が３基、弥生時代前期初頭の住居跡２棟、埋設土器４基、土器集中地点が10ヶ所、古代の竪穴住居跡３棟、江戸時代の掘建柱建物跡などが検出されたが、縄文晩期の遺物や遺構は検出しなかった。

②I 区の調査

I 区の調査区の東側では、昭和49年の調査により縄文時代後・晩期の土坑墓４基と赤色顔料で赤く染まった人骨が８体確認されており、今回の調査でも土坑墓は11基見つかり、墓域が西に広がることが確認された。土坑墓の１基からは赤色顔料と粉状になった骨の下から土製の耳飾りが２点出土した。ほかに、縄文時代晩期初め（大洞BC式）の壺や鉢などがまとまって出土した土坑や縄文時代中期末から後期初頭の住居跡や近世の竪穴遺構などを検出した。

③II 区の調査（水場遺構と思われる遺構の検出）

H区は「南の沢」を埋めている泥炭層の調査である。C区（平成12年度調査）で確認した「南の沢」からは赤漆塗りの木胎漆器や多数の木製品が出土したが、沢の全幅はつかめず調査を終了した。そのためH区はC区の南側に重ねるように設定し、沢幅の調査と合わせ、泥炭層の調査も目的として行った。調査の結果、沢は一番深い場所で地表から約3.5ｍ、幅９ｍほどであり、沢を埋める泥炭層からは、縄文晩期初めの土器や石器と共に、赤漆塗りの櫛・弓・腕輪や樹皮製品、藍胎漆器や撚り紐、籠状の編物や籠状木製品のほか、1,000点を超える加工木材が出土した。

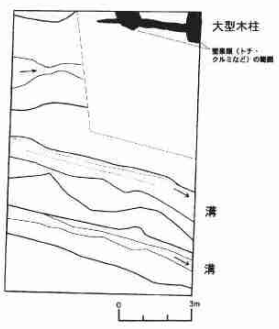
さらに沢を渡った南岸には、沢と平行する溝が３条検出された。また長さ4.2mを超える木柱や、壁材と考えられる木組みのほか、沢の南岸付近には連続して７本打ち込まれた杭を検出した。溝は出土遺物から晩期のものと考えられ底面には砂の堆積が見られた。溝が掘られたころの沢地は、すでに埋没し泥炭が発達していた考えられるため、水を迂回させるための導水路のような施設と考えられる。また７本の杭列は沢の南岸付近に並んでおり、沢を埋めている湿地に手を加えていた一種の水場遺構と考えられる。水場遺構を検出した沢の調査は完了していないため、H区は来年度も調査する予定であり、遺構の性格などは今後の調査に期待したい。

3. 出土遺物

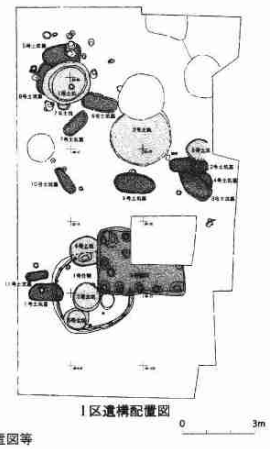
注目の遺物として、H区泥炭層から出土した漆塗りの大型樹皮製容器があげられる。同じものと思われる多数の破片のほかに、もう１点、大型樹皮製容器が出土している。遺物は長さ40cm、幅30cm、厚さ３mmと大型で、樹皮に赤・黒の漆を重ね塗りしたもので、端の部分には約３cmの等間隔で孔が開けられ、その孔から３本のひもが放射状に伸びている。全体の形は不明だが、３本のひもで他の部品と結合させるといった、繊細なつくりが注目される。もう１点の大型樹皮製容器の端には、黒地の漆に赤漆で半円状の文様が連続して描かれており、同じ様に等間隔に孔が開けられている。このほかにも弧状に文様が描かれたものや浅い溝が彫りこまれた破片などが見つかっており、縄文晩期の木工・漆技術の高さを改めて感じさせられた。

中居遺跡のようす

G 区遺構配置図

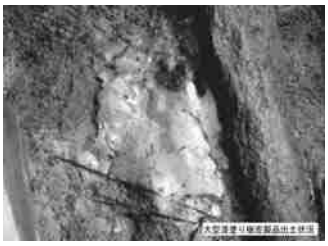


H区遺構配置図



I 区遺構配置図

図１　遺構配置図等



漆塗り樹皮製容器出土状況

2. 一王寺遺跡　縄文前期-中期の遺跡

中居遺跡の西側の台地一帯に位置する。1926（大正 15）年に東北大学の長谷部言人（はせべ・ことんど）、山内清男両氏が発掘調査を行い、バケツ形の土器を多数発見した。これらは縄文前期－後期の土器だったが、これがきっかけとなって現在の「円筒土器」という名称が生まれた。

1929（昭和 4）年には大山史前学研究所の発掘調査で、円筒土器の層が厚さ 1m から 1.5m もあることや、土器とともに獣骨や魚骨、骨角器（こっかくき）が出土したことが報告された。最近では八戸市教委が 1994（平成 6）年から 1998（平成 10）年まで試掘調査を行い、縄文前期・中期の遺構や遺物のほかに、縄文晩期初めの竪穴住居や晩期後半の土器などが確認された。

3. 堀田遺跡　、縄文時代中期の遺跡

中居遺跡の北側の台地の先端部に位置し、東側には新井田川が流れる。1932（昭和 7）年にたまたま縄文時代の竪穴住居が見つかり、付近から宋銭（景徳元宝）が出土した。

当時は、東北北部の縄文時代がいつまで続いていたのかということについて研究者の意見が分かれていたが、このうち喜田貞吉氏は堀田遺跡などの宋銭を手がかりにして「東北北部では、金属器が使われる平安時代末期まで縄文時代の生活が続いていた」と主張。1936（昭和 11）年に、「縄文の終末年代が地方によって大きく違うことはない」とする山内清男氏との間で、縄文時代の終末をめぐる考古学史上有名な論争（ミネルヴァ論争）を繰り広げた。 戦後になると、道路工事に伴う発掘調査を八戸市教委が実施。

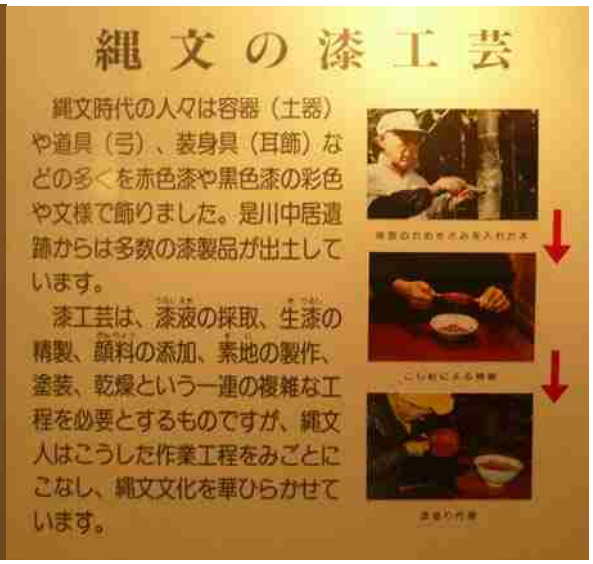
1972（昭和 47）年には縄文中期の竪穴住居、1980（昭和 55）年には縄文中期の土坑（どこう）や弥生前期の土器が発見された。

弥生土器の中には籾（もみ）痕がついたものも見つかった。

八戸　是川遺跡・風張遺跡全景
2008. 10. 31.

是川中居遺跡の出土品
泥炭層が堆積しており、ここから土器とともに多くの植物質遺物が出土しました。木製の弓、飾り太刀、箆形木製品、腕輪、櫛、耳飾りなどをはじめカゴを芯に漆で塗り固めた籃胎漆器や、木地を刳りぬいて作った鉢や高杯などの容器類があります。また蕨類の繊維を使った編み物なども出土しています。出土品の中には赤色の顔料を混ぜた漆を塗り、美しく仕上げたものも多く、複雑な漆工芸の技術も使いこなしていたことがわかります。
中居遺跡出土品
一王寺遺跡出土品

縄文の漆工芸 是川遺跡


縄文の漆工芸
縄文時代の人々は容器（土器）や道具（弓）、装身具（耳飾）などの多くを赤色漆や黒色漆の彩色や文様で飾りました。是川中居遺跡からは多数の漆製品が出土しています。
漆工芸は、漆液の採取、生漆の精製、顔料の添加、素地の製作、塗装、乾燥という一連の複雑な工程を必要とするものですが、縄文人はこうした作業工程をみごとにこなし、縄文文化を華ひらかせています。

是川中居遺跡の土器
遺跡からは、縄文時代晩期の土器が多量に出土しています。壺形土器、鉢形土器、注口土器、台付土器など、器の種類が多く、繊細な文様をもち精巧な造りの土器が多いのが特徴です。赤漆で美しく彩色されたものもあります。これらの土器のほとんどは、亀ケ岡式土器と呼ばれているものです。

是川中居遺跡の土偶
是川中居遺跡の装身具

是川遺跡の土偶

イモガイ状土製品

木胎漆器

参考　　是川中居遺跡の漆工芸　「是川遺跡を中心にして北東北の縄文について」
2008 年 9 月 6 日青森県八戸市 7 日岩手県久慈市で開催されたえみし学会
「第 19 回 えみし文化ゼミナール」講演
……小林和彦是川縄文学習館館長
http://www.jomon.com/~emisi/semi/19semi/resume/kobayashi/kobayashi.htm　より

是川中居遺跡の発見の中で特筆すべきはやはり漆工芸で、植物質製品はもとより，漆工品についてもわが国ではじめてまとまって出土した遺跡でもある。数多くの製品と製作に関わったと考えられる要具類がある。

泉山氏のコレクションには，漆塗り木製容器，籃胎漆器，彩文のある樹皮製容器，漆塗り弓，飾り太刀，赤色漆塗り櫛，赤色漆塗り耳飾り，漆塗り腕輪，漆塗りの土器がある。植物質製品は縄文晩期前葉のもので，漆塗り土器はその時期を中心に晩期後葉（～大洞Ａ式）のものまで出土している。

木製容器は，赤色漆塗り鉢，壺，高杯など，それぞれ比較的小形のものが残されている。高杯は透かしのある高台の上に浅い鉢がのるもので，なかには胴部外側に渦巻き文様を浮き彫り風に彫刻し，口縁部に１個小さな突起が削りだされているものがある。かなり薄手に削りだされた精巧なもので，黒い漆を下地に，光沢を持った赤色漆がしっかりと塗られている。最近の素材調査で，トチノキが使われていることがわかった。トチノキは現在の漆器製作においても，優良な素材として，椀や盆の木地として盛んに使われている。縄文時代の人びとも，樹種による木材の性質の違いを熟知して素材を選択していたのである。

籃胎漆器は，かごを芯に漆で塗り固めたもので，ここには鉢と壺がある。鉢は，方形の底と柔らかく膨らむ胴をもつ。母胎となるかごは，底を幅広の材料で網代編みし，胴は経・緯とも太さ１㎜内外の素材を用いて細密に編み上げている。全体にかなり薄手に作られており，塗装部分を含めても厚さは２㎜程度。かごの編み目を埋めるためにパテのように使われている下地は，漆に植物質の粉末を混ぜ合わせた，現在の漆工で木屎漆と呼ばれるものに近いものが使われているらしい。上塗りに使われている赤色漆は，おそらくベンガラを混ぜたもので，落ち着いた美しい発色になっている。

弓は，泉山氏の発掘品には５張ある。いずれも自然木から作り出された丸木弓であり，１張は白木弓，残りは漆塗りの弓である。今回出品の弓は，赤色漆塗りで，細かく破損しているが，接合してほぼ完全な形に復元されている。長さは約 130 ㎝。断面形はやや扁平で，細身，華奢なつくりの弓である。一方の弭はヒョウタン形のこぶを削り出している。黒色漆で下地をしてから，４本１単位を基本に一定の間隔をあけ所々に樹皮（サクラ類）を巻きつけて，補強と装飾の効果を上げている。その上から全体に厚く赤色漆を塗っている。

飾り太刀は，鞘に収められた太刀の形を連想させる木製品である。柄の両端を球状に削り出し，渦巻き風の文様を彫刻している。鞘にあたる部分は扁平で，刃および棟に相当する両側には，何かが埋め込まれていたような小さな穴が連続して開けられている。彫刻などは精緻で力強く，厚く塗られた赤色漆も鮮やかで，華やかで堂々とした造形である。この木製品は，1928 年（昭和 3）9 月の発掘によって出土したことが泉山斐次郎氏邸に保管されてきた氏のノートによってわかる。

赤色漆塗り櫛は 6 点ある。いずれも結歯式の竪櫛で，櫛歯は欠落して，棟だけの資料である。棟に残された歯が脱落した跡を見ると，歯が丸棒であったこと，歯の数が 8～9 本であったことなどがわかる。棟の形は半円形のもの，２つの角のような突起を持ち透かし穴を開けたものなどがある。耳飾りは滑車形で，土製のものと木製のものとがある。木製の耳飾りはいずれも赤色漆を塗って仕上げてある。短い円筒の両側をやや外側に開かせた形で，装着したときに正面を向く側をより大きく開かせて装飾的な彫刻を施している。大きさは直径 1 ㎝～3 ㎝である。

漆塗り腕輪は，今回 5 点出品されている。1 点は土製で，他は木製である。木製のものは蔓性の弾力のある植物を輪にして漆で固めたもので，下地に黒色漆を塗り，その上に赤色漆を塗っている。土製の腕輪は，黒色漆の下地に赤色漆で半円形を連ねた文様を描いている。

漆塗りの土器（今回5点出品）は，壺を中心に浅鉢，台付土器，注口土器などに見られる。基本的には赤色漆一色で全体を塗っており，塗り分けによって文様を描いたものはない。黒色の漆で下地を施し，赤色漆を 1 回塗りする場合が多く，土器に赤色漆を直接 1 回塗って仕上げていることもある。厚くしっかりと塗られて，漆特有の落ち着いた光沢を留めている漆塗り土器も，何回も塗り重ねを行っている訳ではない。ここには，数少ない工程で上質の仕上がりを得る，技術の確かさがある。

要具類には，漆を入れた土器，赤色顔料を粉砕調整するのに使われた石皿，赤色顔料を入れた壺形土器などがある。漆を入れた土器には壺，鉢，深鉢，台付鉢などがある。ウルシの木からの漆の採取，運搬，精製，塗装作業など，さまざまな工程に使われた漆の容器である。他の用途の土器が破損したものを転用して使ったものがある一方で，文様のない粗製の小形深鉢のように，漆容器として使うために作られたと考えられる専用の土器もある。赤色漆を作り出すために使われた顔料には，ベンガラ（酸化第二鉄）と水銀朱（硫化水銀）とがある。中居遺跡からはこれらの顔料がそれぞれ壺の中に保管された状態で発見されている。

これらの中居遺跡の漆関係資料はすべて 1920 年代に出土したもので，その量の多さ，種類の多さ，石器時代のものとは考えられないほど洗練された技術の存在など，当時は他にほとんど類例のない発見として注目された。その後 1950 年頃から各地で低湿地遺跡の発掘調査が行われる機会が多くなり，それに伴って漆工関係の資料も増加してきた。

現在では，縄文時代の漆工芸は前期段階にはすでに北海道南部，東北，関東，北陸から山陰地方までの広い範囲で確認されており，それ以降の各時期，それぞれの地域での発見によって，縄文文化のなかに漆工技術が定着している様子が，明らかになっている。

漆工芸は縄文社会に広く普及していた普遍的な技術であった。

是川中居遺跡の出土品は，その縄文漆の実態を明らかにするうえで重要な役割を果たしてきた。

1999 年からは是川遺跡整備事業の一環として，低湿地部分の発掘調査が行われ，漆濾し布として使われたアンギンなど，新しい注目すべき発見が相次いだ。低湿地における現在の考古学的な水準での調査が進むことによって，70～80 年前の泉山氏のコレクションについての理解もさらに深まることが期待されている。

[参考] 資料による是川遺跡・風張遺跡概要

2、 縄文後期の環状集落 是川風張遺跡　概要

資料抜粋まとめのベース資料　「風張遺跡の縄文社会」 特別展　八戸市博物館 より抜書き

- 合掌する土偶
- 広場を取り囲む竪穴住居の環状集落
- 3500 年前 縄文時代後期に東北の最北端で「炭化米」が 2 粒出土した　稲作の出現に一石を投じる

八戸是川・風張遺跡出土　土偶

風張1遺跡は、八戸市中心部から南へ 4.2kmの新井田川下流域右岸で、縄文時代晩期の遺跡として有名な是川遺跡の対岸に位置する。昭和 63 年から平成 4 年までの 5 か年にわたり発掘調査が行われ、昭和縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡で、その大半は縄文時代後期後半（今から約 3500～3000 年前）であることがわかった.

現在、この地には老人ホームが建てられている。

検出遺構はこれまで、竪穴住居跡 280 棟　竪穴遺構 3 棟　掘立柱建物 20 棟　土坑 1662 基　土コウ墓 127 基　奥外炉 34 基　集石遺構 3 基　埋設土器 2 基　溝跡 4 条　環濠 1 重　溝状ピット 3 基が、中央部の緩傾斜地を中心に、時代によって先端部にかけての緩傾斜地に広がっている。

縄文早期・中期には中央部の緩傾斜地が選択され、
後期には前半期先端部高台から最先端部にかけての狭長な緩傾斜地
後半期にはもとの中央部の緩傾斜地が選択されている。
弥生時代には縄文後期後半期の占地と重複。古代には弥生時代・縄文後期後半期の占地と重複するが、さらに突端側への広がりが見られる。

これらの遺構は縄文・弥生・奈良・平安の各時代に集落を営んでいた複合集落であるが、縄文後期後半の遺構が最も多く検出されている。

そして、墓域を中心とした規則性のある環状集落の形態を示している。

- **縄文後期後半の環濠集落**

集落は東西 126m 南北 105mj まで確認されているが、多少東西に調査域外まで広がると予想されている。

調査した遺構の中で、この集落に係わりがあるのは竪穴住居跡 184 棟

掘立柱建物 19 棟　土坑 1367 基以上　　土コウ墓 127 基　奥外炉 4 基以上などと考えられている。

中心部に 2 ケ所の墓域が設けられ、それを取り囲むように土坑・掘立柱建物　そして外周に竪穴住居が取り囲む規則性を持っている。

遺構の中でも竪穴住居群の重複が著しく何代にも渡ってこの集落が維持されたことを示している。

1. 竪穴住居跡

5m 前後が平均の大きさの円形の平面形

一般的に住居中央部床面に地床炉または石囲炉を囲んで　上屋を支える 4 本の主柱穴があり、壁側に小柱穴が巡る壁面の一部に出入り口と考えられる小穴または溝状の施設を有する。

2. 掘立柱建物

倉庫的な機能を有する施設と考えられ、主流の 4 本柱や 6 本柱の組み合わせが見られる。

一般に 4 本柱では一辺が 3～4m の方形を呈する。

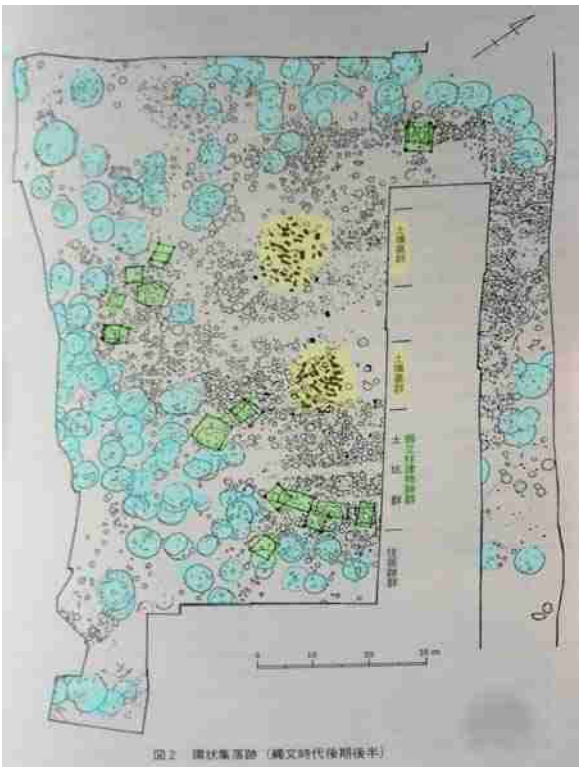
6 本柱では長軸 4.8～6.4m　短軸 3～5.1m　の長方形または 6 角形の形状をなしている。

これら遺構の柱穴径は 0.3m～1m 規模で円形に彫られている。

3. 土坑

大きさ径 1m 前後の円形の平面形　フラスコ型　または箱型の断面形。　クリ・トチ・クルミなど堅果類が検出される土坑の存在から貯蔵穴と見られる。

一部の土坑の壁に赤変したものが見られ、長期保存のため、土坑を乾燥処理していた可能性がある。



風張遺跡　縄文後期の環状集落配置

4. 土壙墓

集落の中心部　東西に 14m の距離を置いて約 15m.範囲内にそれぞれ　65 基・55 基からなる墓域が楕円状にある。

土壙墓の幾つかには赤色土壌を散布したものが見られる。

土壙墓から出土した遺物は　人骨と副葬品である石製の玉類で人骨は 1 例

石製の玉類の総数 290 個　材質はほとんどがヒスイで　検出された土壙墓は 20 基と 2 割程度

5. 炭化米の出土

また、縄文後期末とされる竪穴住居跡で 7 粒　縄文の炭化米（重要文化財）が出土。“日本最古のコメ”であり、稲作には不適と考えられていた東北最北端の八戸地方で、しかも、縄文時代の後期にコメ作りが行われていた可能性を議論されるが、まだ確認されていない。

出土した炭化米（顕微鏡写真）

遺跡の中心部　白線部は墓

竪穴住居跡群

掘立柱建物跡

炭化米が出土した竪穴住居

トチの実を貯蔵した土坑

土坑墓群

上記したごとく 風張の縄文後期集落は真ん中に集団墓地、掘立柱建物群、竪穴住居群が環状に配置されていたようで 縄文集落の特徴をよく表した縄文後期の代表的な環状集落である。そして、新井田川を挟んで反対側の丘には縄文晩期の是川遺跡など、数多くの縄文遺跡が新井田川流域にあり、是川遺跡の形成を含め、この流域の人の移動を考える上で極めて貴重なものである。

● **出土遺物**

出土した遺物は、土器 131、土製品 177、石器 55、石製品 301 の計 664 の遺物。附として炭化米 7 粒である。

1. 土偶は、「合掌土偶」を代表とし、「腕を組む土偶」など、縄文時代後期後半の風俗を知る上で貴重なものが多い。
2. 土製品は、スタンプ形土製品と称されるもので、形などその多様性が注目されており、青森県東部の縄文時代後期の変化を考える上で重要である。
3. 土器は焼成前に胴下半部に孔を穿つ壷形土器・筒形土器・香炉形土器などが出土し、美術工芸的に優れた亀ヶ岡土器の成立の前段階を知る上で貴重なものである。

土器（ 1 ）

土器（ 2 ）

土偶

スタンプ型土製品

玉類

耳飾

出土状況

合掌する土偶

出土状況

腕組する土偶

八戸是川・風張遺跡出土　土偶